第二十六回響焔賞受賞作品

（平成十一年十二月一日発行響焔十二月号に掲載）

ひまわり

米田　規子

雲の峰地下鉄新駅わが町に

スパイスの効いたピクルス熱帯夜

みずいろの水着が似合う十九歳

ひと房のぶどう仏蘭西に恋をする

蟬時雨森のホテルへ人と犬

ベネチアングラスの館黒揚羽

万緑を沈め海賊船赤し

夏うぐいす甘味処の藍のれん

サングラスかけ閻魔堂に踏み込みぬ

ひまわり大輪アメリカへ子が発ちて

苦瓜と豚肉炒め更年期

練習曲「革命」を弾き緋のカンナ

子をおもい国際電話待つ残暑

秋の日のピアノの上にダリ画集

五十歳からの出発黒葡萄

受賞のことば

米田　規子

今年の夏は、家族がフランス・アメリカ・日本と三ケ所に分かれて過ごしました。夫は仕事で帰国できず、娘は語学の勉強のためアメリカへ飛び立って行きました。息子は秋に出品する絵を描いていました。そんな中、私は響焔賞に応募する作品がなかなかできず、苦しんでいました。そこでもう一度作品のテーマ、今、

何が一番詠いたいかのかを自分に問いました。

ひとつは今年五十歳になったこと。もうひとつは、自分のしたい事のためには、世界中どこへでも飛んでいくという我が家の生活でした。このふたつを引括めて自分史としての十五句を作りたいと思いました。しかしながら肝心の句が生まれず、力のなさを痛感するばかりでした。締切ぎりぎりまで粘り、やっと出来上がりました。

今回、本当に思いがけず響焔賞を頂き、うれしさと不安で胸がいっぱいです。まだまだ未熟な私ですが、これからもマイペースで努力します。和知先生、山崎先生、そして皆様、今後とも御指導下さいますようお願い申し上げます。ありがとうございました。

第二十九回響焔賞受賞作品

（平成十四年四月二十五日発行響焔五月号に掲載）

明日があり

米田　規子

赤い実に鵯来て朝のクロワッサン

絵手紙に大きな林檎ほがらかに

黄落期わが足音を確かめる

くるまれし冬菜の湿りごともらう

聖誕祭金のリボンの赤ワイン

息子病むパンジー寒き日も咲いて

いくたびも指きりげんまん冬銀河

一月のひかり祈るため跪く

大安寒晴豚足を提げており

明日があり寒暮の富士のシルエット

珈琲と音楽と猫寒の雨

一歩踏み出し青空と辛夷の芽

形状記憶ワイシャツ二枚日脚伸ぶ

さそわれて如月鎌倉芸術館

イタリア風野菜のマリネ春隣

受賞のことば

米田　規子

「俳句って楽しい。」そう思って続けていた俳句が、昨年、一昨年あたりからだんだん苦しくなりました。自分の句を否定ばかりするので句の数も極端に少なくなりました。その事を埋め合わせるように、たくさんの人の俳句を読みました。多くの作品を読むことによって五・七・五の世界が今までよりも広く深く感じ

られました。

そんな折の作品募集、まず出品できるかどうかが大問題でした。ただひとつ決まっていたのは「希望」というテーマです。それを心の軸に四苦八苦して仕上げましたが、まだまだ未熟なのでどこまで表現できたか分りません。

響焔賞受賞のお知らせを頂いてから約一ヶ月。今、しみじみとしたよろこびを感じています。苦しい俳句から少しずつ抜け出したいとも思っています。

いつもご指導下さっている山崎主宰はじめ和知名著主宰、そして皆様、本当にありがとうございました。